科目ナンバリング	U-LAS00 20018 LJ34						
授業科目名<英訳>	宗教学各論II（死生学） Topics in Religious Studies II (Thanatology)			担当者所属職名・氏名	非常勤講師 竹内　綱史		
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	哲学・思想(各論)		使用言語	日本語	
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義（対面授業科目）
開講年度・開講期	2026・後期	曜時限	火1	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

本講義では、さまざまな作品から読み取れる日本の死生観について考察する。「作品」とはここでは芸術作品や文学作品のみならず、映画・ドラマ・アニメ・マンガ・歌なども含むものとする。

「死生観」とは、死との向き合い方や人生観と連動した死後についての考え方を指す語である。いつか必ず訪れる死といかに向き合うか、死んだあとはどうなるのか、といったことは、意識的にせよ無意識的にせよ、各々の人生観に大きな影響を与えている。死から目を背けて生きるのか、明日にも死ぬかもしれない覚悟をもって生きるのか、死んだら無になると思って生きるのか、死後には草葉の陰から子孫たちを見守ると信じて生きるのか、こういったことは生き方に枠組みを与えずにはおかないものであり、人間の生におけるもっとも重要なテーマ（の一つ）として、さまざまな作品の中で繰り返し繰り返し扱われてきた。本講義では、具体的な作品を取り上げながら、主に戦後から現代にかけての日本の死生観について考えてみたい。

もっとも、「戦後日本」というのは範囲を絞るための便宜的な限定であることは付言しておきたい。前近代についてはある程度の一般化が可能かもしれないが、近現代における死生観についてはそのように一般化できるとは考えられないからである。むしろ個々の作品で表現される死生観のそれぞれを考察しながら、私たち自身の死生観を見直すきっかけとしたい。

[到達目標]

1. さまざまな作品から死生観を読み取れるようになる。
2. 日本におけるさまざまな死生観を理解する。
3. 自分自身の死生観を育めるようになる。

[授業計画と内容]

伝統的とされる日本の死生観を確認した後、戦後から現代にかけての日本の死生観について、さまざまな作品を扱いながら授業を行う予定である。ときどき授業中にミニレポートを書いてもらい、できる限りそれも講義に反映する予定。

1. イントロダクション（第1回）
2. 伝統的とされる日本の死生観について（第2回）
3. 戦争の爪痕・戦争の語られ方（第3回～第5回）
4. 不治の病との闘い（第6回～第8回）
5. 新たな死生観の模索（第9回～第11回）
6. 震災、そして現代（第12回～第14回）

扱う予定の作品（変更もあり得る）：

吉田満『戦艦大和ノ最期』（1952年（初稿は1946年））、日本戦没学生手記編集委員会『きけわだつみのこえ』（1949年-）、黒澤明『生きる』（1952年）、小津安二郎『東京物語』（1953年）、高見順『死の淵より』（1964年）、三島由紀夫『豊穣の海』（1965-1970年）、有吉佐和子『恍惚の人』（1972年）、松本零士『宇宙戦艦ヤマト』（1974年-）、宮崎駿『風の谷のナウシカ』（映画版1984年、漫画版1982-1994年）、村上春樹『ノルウェイの森』（1987年）、宮崎駿『千と千

宗教学各論II（死生学）(2)へ続く↓↓↓

尋の神隠し』（2001年）、片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』（2001年）、百田尚樹（原作）・山崎貴（映画版監督）『永遠の0』（原作2006年、映画2013年）、滝田洋二郎『おくりびと』（2008年）、長井龍雪（監督）・岡田麿里（脚本）『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない』（2011年）、いとうせいこう『想像ラジオ』（2013年）、暁佳奈（原作）・石立太一（アニメ版監督）『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』（アニメ版2018年、原作2015-2020年）、山田鐘人／アベツカサ（漫画原作）・斎藤圭一郎（アニメ版監督）『葬送のフリーレン』（漫画版2020年-、アニメ版2023年-）、平野啓一郎『本心』（2021年）、新海誠『すずめの戸締まり』（2022年）、早川千絵『PLAN 75』（2022年） etc.

フィードバック（第15回）については別途連絡する。

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

平常点（60点）と定期試験（40点）
平常点は、授業内容に関するミニレポートを数回に1回提出してもらい、それによって評価する。
定期試験は、自分で一つ作品を選び、そこで表現されている死生観について論じてもらうことを予定している。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
岸本英夫『死を見つめる心』（講談社文庫、1973年）ISBN: 9784061340244
島薗進『日本人の死生観を読む』（朝日選書、2012年）ISBN:9784022599858
島薗進『死生観を問う』（朝日選書、2023年）ISBN:9784022631282
五来重『日本人の死生観』（講談社学術文庫、2021年）ISBN:9784065257494
立川昭二『日本人の死生観』（ちくま学芸文庫、2018年）ISBN:9784480098887
このほかにも授業中に適宜参考文献を挙げる。興味を持ったものには自分からどんどんあたってほしい。

[授業外学修（予習・復習）等]

予習としては、次回の授業のテーマに関係する問題について自分で考えたり調べたりすること。
授業後には、授業で紹介をしたいくつかの文献を読み、授業で説明したテーマの理解を深めること。

[その他（オフィスアワー等）]

死生学を学ぶことは、自分自身の人生を見直し、生と死について根本的に考えることを要求される。心して受講してほしい。
ミニレポートの提出やお知らせ・教員とのやりとりはLMSを用いる。

[主要授業科目（学部・学科名）]